

古代における中日文化交流の一側面
—蹴鞠文化を中心に—

An Aspect of China-Japan Cultural Exchange in ancient times
— Focusing on the Kemari culture —

北京外国語大学北京日本学研究中心 センター 潘蕾

キーワード：蹴鞠、対抗性、技術性、娯楽性、蹴鞠道

Abstract:

Looking back at the history of Nippon Kemari, it can be said that the late stage of Heian period is a big turning point. During this period, under the protection of Goshirakawa-in and Gotoba-in, masterpieces and experts of Kemari turn out in great numbers so that Kemari become extremely grand, and then until the thirteenth century, the sophistication of Kemari was enhanced as a competition. At the same time, the facilities, equipment, costumes, styles of manners, competitions, acting etc. are arranged and the ancient practices are also established, as well as the expert of Kemari school which lore and teach as a profession was established. In this paper, based on previous studies, with a view to its' acceptance of the China Kemari culture, we will focus on the late stage of Heian period. Then, by considering the way from the game of Kemari to the arts, I'd like to draw one aspect of China-Japan cultural exchanges in ancient times, and furthermore, try to consider the background that how Japan Kemari were handed down to the present.

はじめに

2004年7月15日、当時国際サッカー連盟 (FIFA) の会長を務めていたゼップ・ブラッター氏は、「第三回中国国際サッカー博覧会」に出席した際、「世界のサッカーの発祥地は中国である。」と宣言し、中国山東省の淄博市に「サッカー発祥の地」の認定証書を送った。つまり、国際サッカー連盟はサッカーの起源を中国の戦国時代に行われた蹴鞠と認定したのである。中国で発祥した蹴鞠は後に日本にも伝わったが、中国の蹴鞠が明の時代以後徐々に衰えたのに対し、日本の蹴鞠は今日まで伝承されることとなった。

中国では、1980年代以後蹴鞠に関する研究が盛んに行われるようになり、研究者の関心は主に中国蹴鞠の起源、発展、隆盛、衰退及びその原因に集中している¹。一方、日本の蹴鞠研究は、

主に日本蹴鞠の発展及びその伝承に焦点が当てられている²。ほかに、中日両国のスポーツ交流に注目する論考もある³が、中国から伝えられた蹴鞠がいかなる発展を遂げて日本の伝統芸能の一つとなったのかについてはあまり触れていない。

日本蹴鞠の歴史を振り返ってみると、平安時代末期は大きな転換期だと言える。この時期においては、後白河院、後鳥羽院の庇護のもとに蹴鞠の名手・達人が輩出して極めて盛大となり、十三世紀に至ると競技として洗練度が高まった。それとともに、施設・設備、用具・装束、作法・競技・演技等の様式が整えられて故実ができ上がり、その伝承・教授を家職とする蹴鞠道の家が成立した。本稿では、先行研究を踏まえたうえで、中国蹴鞠文化の受容を視野に入れながら、平安時代末期の蹴鞠文化にスポットをあて、蹴鞠の遊戯から芸道への道のりを考察することにより、古代における中日文化交流の一側面を描き出し、さらに、日本の蹴鞠が今日まで伝承されたことの背景を検討してみたい。

一、中国の蹴鞠

1. 蹴鞠の始まり

中国の蹴鞠は遅くとも紀元前300年以前の戦国時代に遡ることができ、『史記』蘇秦列伝第九⁴と『戦国策』斉巻第四⁵に蹴鞠に関する記録が見える。それらの記述によれば、臨淄という地域は大変裕福で充実しており、その住民は竿を吹き瑟を鼓し、琴を弾き筑を撃ち、鶏を闘わせ犬を競わせ、六博をしたり蹴鞠をしたりしない者はいないという。つまり、当時の蹴鞠は裕福な生活を送っていた臨淄住民の娯楽の一つであった。また、『史記集解』所引の前漢・劉向（前77～前6）の撰した『別録』に「蹴鞠者、傳言黃帝所作。或曰。起戰國之時。蹋鞠、兵勢也。所以練武士、知有材也。皆因嬉戲而講練之。」とあり、この記述から、蹴鞠はかつて軍隊の人材選びと訓練の一環として行われていたことが窺える。

2. 蹴鞠の規範化

後漢・班固（32～92）らによって編纂された『漢書』卷三十・芸文志第十に、兵書として『蹴鞠』二十五篇が記載されている。『漢書』芸文志は兵家を兵権謀家・兵形勢家・兵陰陽家・兵技巧家に分けたが、『蹴鞠』二十五篇が軍事訓練を説く兵技巧十三家に加えられた。この記載から軍事訓練において蹴鞠が極めて重要視されていたと推測できよう。『蹴鞠』二十五篇は後に散逸して現存しないが、中国初の蹴鞠専門書と見なされる。

唐代初期に成立した類書『芸文類聚』所引の後漢・李尤（44～126）の著した「鞠城銘」には「園鞠方牆、仿像陰陽。法月衡對、二六相當。建長立平、其列有常。不以親疏、不有阿私。端心平意、莫怨其非。鞠政由然、況乎執機。」という記述がある。この記述から以下のことが読み取れる。

①鞠が円形で競技場が壁に囲まれた方形であり、陰陽学の説く天円地方の宇宙観と合致する。

②蹴鞠をする者は2チームに分けて競技し、1チームが6人からなる。12人は一年の12ヶ月を表す。

③各チームに隊長がいて、ゲームの際には裁判がいた。共通のルールに則ってゲームが行わ

れた。

④裁判は交際の疎密に左右されず、私心を捨てることが求められる。

⑤選手は平常心を保ち、負けても相手を怨まないことが求められる。

このように、漢代に至ると、蹴鞠の規範化が進められ、軍事訓練に求められる対抗性が保たれていながらも、遊戯としての公平性及び競技者の平常心も強調されるようになったのである。

3. 宮廷蹴鞠の隆盛

漢代以前の蹴鞠は一部の地域の市民の娯楽及び軍事訓練の一環として発展してきたが、漢代以後、統治者の提唱により宮廷でも蹴鞠が盛んに行われるようになった。中国の歴史上、蹴鞠を愛好した皇帝として、漢の高祖・劉邦（前247～前195）と武帝・劉徹（前156～前87）、唐の玄宗・李隆基（685～762）、宋の太祖・趙匡胤（927～976）と太宗・趙光義（939～997）及び徽宗・趙佶（1082～1135）、明の宣宗・朱瞻基（1399～1435）などが挙げられる。北京故宮博物院所蔵の「宋太祖蹴鞠図」は、北宋末南宋初の画家・蘇漢臣が原作で宋末元初の画家・錢選が臨模したものであるが、そこには宋の太祖・趙匡胤がその弟の趙光義（太宗）及び体格のいい大臣4人に囲まれてリフティングしている様子が描かれている。また、同じく北京故宮博物院所蔵の「宣宗行楽図」は明代の宮廷画家・商喜の作品であるが、そこには明の宣宗・朱瞻基が宮中で宦官たちの蹴鞠競技を観戦している様子が描かれている。それらの図には、鞠はいずれも複数の皮で縫い合わされたような丸いものと描かれており、高く蹴られているところを見れば、当時の鞠は軽いものであったと推測できる。しかも、蹴鞠をする者の動きから、対抗性の強い遊戯ではないと窺える。

4. 蹴鞠の普及

蹴鞠の民間普及は唐代に入ってからのものであり、宋代に至るとその全盛期を迎えた。明代中後期に成立したとされる蹴鞠の専門書『蹴鞠譜』所引の「鷓鴣天」（宋・無名氏）に、「巧匠園縫異様花、身輕體健實堪誇。能令公子精神爽、善誘王孫禮義加。宜富貴、逞奢華。一團和氣遍天涯。宋祖昔日皆曾習、占斷風流第一家。」とあり、蹴鞠をすることを通じて体を鍛えて礼儀を身につけるのみならず、宋の太祖を掲げながら、蹴鞠ほど風流なことはないと説いている。この詞は蹴鞠の宣伝文句ともなっていたが、そこから鞠の作り方もある程度窺い知ることができる。つまり、縫われた鞠に空気が入れたのである。

宋代には、齊雲社という全国規模の蹴鞠の同業者組合が民間にできた。その名前からも窺えるように、高く蹴られた鞠が雲まで届くようにというのが齊雲社会員の理想であった。『蹴鞠譜』によれば、齊雲社の仕事が主に三つあり、すなわち、齊雲社の宣伝、会員の募集と管理、蹴鞠試合の企画である。厳しい社則も作られ、道教の神である「清源妙道真君」（俗称二郎神）が蹴鞠業の神として崇められた。

蹴鞠の普及に伴い、唐詩宋詞にも蹴鞠がよく登場するようになった。例えば、盛唐の詩人・王維が「寒食城東即事」（『全唐詩』巻一百二十五に収録）の中で、「清溪一道穿桃李、演漾綠蒲涵

白芷。溪上人家凡幾家、落花半落東流水。蹴鞠屢過飛鳥上、鞦韆競出垂楊裏。少年分日作遨遊、不用清明兼上巳。」⁶と読み、晩唐の詩人・韋莊が「長安清明」（『全唐詩』巻七百に収録）の中で、「蚤是傷春夢雨天、可堪芳草更芊芊。内官初賜清明火、上相閒分白打錢。紫陌亂嘶紅叱撥、綠楊高映畫鞦韆。遊人記得承平事、暗喜風光似昔年。」⁷と読んだ。上記の詩によれば、蹴鞠は主に清明節前後に行われ、少年たちが連日遊戯に耽り、しばしば鞠を飛んでいる鳥よりも高く蹴った。暇の大臣たちが宮中で白打をし、勝者が賞金をもらっていたという。ここで言う白打とは、蹴鞠の一種であり、ゴールが設けられず、複数の人が頭、肩、胸、背、腰、腹、膝、足を以てリフティングすることを指す。よって、対抗性よりも技術性・娯楽性が重んじられていたと思われる。

5. 女子蹴鞠

対抗性の弱化に伴い、漢代以後、女子も蹴鞠を行うようになった。上海博物館所蔵の明代画家・杜堇の「仕女図」には、容姿端麗の女性たちが庭園の中で蹴鞠をしている場面が描かれている。明代の文人・銭福は「蹴鞠」という詩の中で、「蹴鞠當場二月天、仙風吹下兩嬋娟。汗沾粉面花含露、塵撲蛾眉柳帶煙。翠袖低垂籠玉筍、紅裙斜曳露金蓮。幾回蹴罷嬌無力、恨煞長安美少年。」と、女性たちが汗を流しながら優雅に蹴鞠をしていることをリアルに描写している。対抗性・技術性よりも、女子蹴鞠にはより娯楽性・観賞性が求められていたと言えよう。

6. 蹴鞠の衰退

明の洪武二十二（1389）年に、兵士たちが蹴鞠に熱中して訓練をおろそかにしていることを理由に、太祖・朱元璋（1328～1398）が「下棋者断手、蹴圓者卸脚。」という蹴鞠の軍中禁止令を出した。さらに、清代になると、漢民族の蹴鞠文化に馴染まない満州族の統治者は蹴鞠とスケートを融合して氷上蹴鞠という遊戯を考案したものの、伝統的な蹴鞠を全面的に禁止するようになった。こうして、明代以後、蹴鞠が徐々に衰退して中国から姿を消していったのである。

7. 蹴鞠の隆盛及び衰退の背景

前述したように、中国では蹴鞠が最も隆盛したのは唐と宋の時代であり、唐と宋はいずれも経済的に繁栄した時代である。経済的繁栄が市民生活の豊かさをもたらし、対抗性の弱化と娯楽性の強化に伴い、蹴鞠が性別・年齢・身分にかかわらず広く一般的に行われる遊戯となった。その上、同業者組合の出現により、蹴鞠の用具・施設・規則・技術などが極められ、より一層発展した。しかし、明と清の時代以来、統治者の禁圧を契機に、蹴鞠が衰退の一途を辿った。蹴鞠の発生・発展・隆盛・衰退の歴史は儒釈道融合の中国思想文化に深く関わっていると考えられる。儒家の説く「中庸」、道家の説く「養生」・「無為自然」、仏教の説く「不慳貪戒」・「不嗔恚戒」、理学の説く「存天理、滅人欲」などは、いずれも勝敗を争うために強く対抗することよりも体を鍛えたり心を楽しませたりするために優雅に行うことを求める。それゆえ、蹴鞠が現代サッカーに発展しなかったのであろう⁸。

二、日本の蹴鞠

1. 蹴鞠の始まり

中国の蹴鞠がいつ日本に伝わったかについての記録はないが、一部の学者が『日本書紀』皇極天皇三(644)年正月条に見える中大兄皇子(626～671。後の天智天皇)が法興寺で打毬していた際に落とした皮鞋を中臣鎌子(614～669。後の藤原鎌足)が拾ったことをきっかけに2人が親しくなった⁹ことを日本における蹴鞠の初見と見なしている。しかし、打毬は馬上あるいは徒歩で毬杖を持って毬門に打ち入れるものであり、今日のポロには似ているが、蹴鞠ではない。また、鎌倉時代初期に成立した説話集『古今著聞集』巻第十一・蹴鞠第十七に、「蹴鞠の逸遊は、前庭の壮観なり。文武天皇の大宝元年にこの興始まりけるとかや。白沙の上、緑樹の景、二六対陳し、殿翼相当す。感興尽し難きものなり。」¹⁰とあり、日本蹴鞠の歴史を大宝元(701)年まで遡っているが、2チームに分けて競技し、1チームが6人からなるという記述は前掲した中国の「鞠城銘」と同じである。よって、蹴鞠が中日交流の盛んな奈良時代に日本に伝わったと推測できよう。

2. 平安時代の宮廷蹴鞠

平安時代に入ってから、蹴鞠に関する記録が度々貴族の日記に登場するようになった。一例を挙げると、藤原実資(957～1045)の『小右記』の寛和二(985)年二月戊子条に、「此間有蹴鞠事、左大將、左衛門督、源中納言、両三位、藤宰相、余及殿上侍臣等、蹴鞠事及黄昏」¹¹とあり、この記述から、公卿たちが宮中で黄昏まで蹴鞠を行っていた様子が窺える。

3. 平安時代末期の蹴鞠文化

前述したように、平安時代末期は日本蹴鞠の歴史上の大きな転換期と言える。ここでは、平安時代末期に成立した絵巻『年中行事絵巻』及び鎌倉時代初期に成立した説話集『古今著聞集』を手がかりに、平安時代末期の蹴鞠文化を一瞥しよう。

(1)『年中行事絵巻』に描かれる蹴鞠

『年中行事絵巻』は平安時代末期に後白河法皇(1127～1192)の勅命により作られ、制作には絵師・常盤光長、故実家・藤原基房(1145～1230)等が関わり、宮中や公家の年中行事を描いた大絵巻物である。1165年前後の成立とされる。60巻以上あったと言われるが、殆んど戦火で焼失してしまい、現存しているのは一部原本を基に江戸時代前期の住吉如慶(1599～1670)・住吉具慶(1631～1705)父子によって写された模本16巻と他3巻の模本に過ぎない。『年中行事絵巻』巻三には蹴鞠に興ずる公卿たちが描かれており¹²、そこから平安時代末期の蹴鞠の様子をある程度窺い知ることができる。

画面の左側に満開の桜を眺めている女性が描かれているため、蹴鞠の季節は春で清明前後であると判断でき、中国の蹴鞠の季節と一致する。画面の中心部に木々が描かれ、東北に桜、東南に柳、西南に楓、西北に松という配置である。木々が懸りと呼ばれて蹴鞠の場所の区切りとなり、

蹴り上げる高さの目安にもなる。事前に蹴鞠場に移植され、その配置は四季の循環を想起させる。このことは中国では蹴鞠をする人数の12人が一年の12ヶ月を表す（「鞠城銘」）ことに似ている。木々の真ん中に高く描かれている鞠は完全な球形ではなく、中央部にくびれがある。蹴鞠をする人数は8人であり、見証役が3人（いずれも右手に檜扇を持つ）おり、見物人がいない。画面に描かれる人物のうち、冠直衣姿の人が3人、狩衣姿の人が8人、僧綱襟姿の人が1人いる。これらの装束から、蹴鞠をする人は男性貴族と僧官であると窺える。また、装束の多様性及び見物人の不在などから、蹴鞠が事前に予定されていたものではないと推測できる。このことは平安時代末期においては蹴鞠が貴族の間で一般的に行われており、場所・用具・人数といった条件さえ整えればいつでも行えることをも物語っている。さらに、画面に描かれている男性貴族及び僧官の足元に注目すると、みな浅沓を履いており、しかも画面の右側に童が冠直衣姿の男性の浅沓の革紐を結び直していると描かれているところから、浅沓が緒でしっかりと足に固定されていると窺えよう。浅沓を履くこと、懸りを以て蹴り上げる高さの目安を明示すること、鞠が高く描かれていることから、鞠は軽いものと考えられる。最後に、描かれている人物の動きから、当時の蹴鞠は激しい遊戯ではないと判断できる。

人物の動き、履く沓、蹴り上げる高さの明示、ゴールがないなどの点を総合すれば、当時の蹴鞠はゴールを目指して勝ち負けを争うのではなく、鞠を地面に落とさないように高く蹴り、他人に次々と優雅に蹴り渡していくという形式の整った遊戯であったと推定できる。この蹴り方は中国唐代以来の白打蹴鞠と類似している。

(2)『古今著聞集』に描かれる蹴鞠

『古今著聞集』は鎌倉時代前期の橘成季によって編纂され、建長六（1254）年に成立した説話集であり、日本三大説話集の一つとされる。六国史以来平安時代中期から鎌倉時代初期に至るまでの事実に基づいた720あまりの説話を三十のテーマに分類してそれぞれ年代順に配列し、しかも前後の説話が内容上相互に関連を持つような整然とした構成となっている。その巻第十一・蹴鞠第十七には、蹴鞠説話十話が収録されている（四〇七話～四一六話）。

その中で、最も詳細な描写が施されたのは第四一〇話「侍従大納言成通の鞠は凡夫の業に非ざる事」である。それによれば、藤原成通が懸りの下に立つこと七千日、鞠の精に守られて蹴鞠の奥義をさわめた。大盤の上で沓音なく蹴ったり、人の肩を踏んで重みなく蹴ったり、清水の高欄を蹴りつつ渡ったり、熊野を詣でて後ろ拝のあと後ろ鞠二百反蹴ったり、父・宗通の邸で牛車を懸りにして下をかい潜りして蹴ったり、鞠を人の三倍の高さに蹴り上げたり、父の座敷に飛び込んだ鞠をとんぼ返りで蹴り出したりした。また、早業を好み、父や鳥羽院に制止されてもやまなかったという¹³。人間業とは思えない蹴り方が綴られている藤原成通（1097～1162）は、平安時代末期の公卿であり、権大納言・藤原宗通の四男として生まれ、蹴鞠の達人として知られて後世まで「蹴聖」と呼ばれた人物である。上記の描写から藤原成通の蹴鞠が技術性・娯楽性を重んじるものであったと窺える。

また、この説話には鞠の精も登場し、「顔人にて手足身は猿にて、三四歳なる児ほどなるもの三人」¹⁴、「眉にかかりたる髪を押しあげたれば、一人が額には春楊花といふ字あり、一人がひ

たひに夏安林といふ字あり、一人が額には秋園といふ字あり。文字、金の色なり。」¹⁵という描写から、鞠の精とは、顔が人で手足体が猿で三・四歳の子供になるもの3人であり、名前はそれぞれ春楊花・夏安林・秋園であると窺える。この名前の付け方は四季の循環を想起させ、冬だけ省かれたのは寒い冬が蹴鞠に向いていないためと推測できよう。前述したように、中国では道教の神である「清源妙道真君」(俗称二郎神)が蹴鞠業の神として崇められていたが、清源妙道真君はよく変身できる神として知られている。日本の鞠の精が顔が人で手足体が猿であるという姿にはよく変身する清源妙道真君と似ているところがあると言えよう。さらに、鞠の精は「御鞠このませ給ふ代は、国さかへ、好き人司なり、福あり、命ながく、病なく、後世までよく候ふなり」¹⁶、「人の身には一日の中にいくらともなきおもひ、みな罪なり。鞠を好ませ給ふ人は、庭にたたせ給ひぬれば、鞠の事より外に思しめず事なければ、自然に後世の縁となり、功德すすみ候へば、必ず好ませ給ふべきなり。」¹⁷と蹴鞠の功德を説いている。すなわち、蹴鞠が好まれる世は国が栄え、立派な人が出世し、福があり、命が長く、病がなく、来世まで幸せになると唱え、仏教思想をうまく蹴鞠の宣伝に取り入れたのである。蹴聖及び鞠の精の出現は蹴鞠の遊戯から芸道へと発展する基礎となったと考えられる。

『古今著聞集』の第四一四話は「後鳥羽院を御鞠の長者と号し奉るべき由、按察使泰通等表を奉る事」であり、そこには承元二(1208)年四月七日に藤原泰通・藤原宗長・藤原雅経の3人が連署して後鳥羽院(1180～1239)に蹴鞠の長者という称号を奉るようにと上表したという記述¹⁸がある。そこに登場する藤原泰通(1147～1210)は第四一〇話の主人公である大納言・藤原成通の猶子であり、藤原宗長(1164～1225)と藤原雅経(1170～1221)は母方の賀茂神主家に蹴鞠の名手が輩出したことから幼少時代より鞠を習い藤原成通に教えを受けたという藤原頼輔の孫であり、いずれも蹴鞠の達人である。彼らは蹴聖・藤原成通の蹴鞠技を継承し、芸能を愛する後鳥羽院に蹴鞠の才能を認められて院近臣に加えられ、藤原雅経の『蹴鞠略記』のような蹴鞠の専門書となる日記をも残した。蹴鞠専門書の出現は蹴鞠道の成立を促した。

おわりに

鎌倉時代初期に至ると、蹴鞠の伝承教授は、藤原宗長を祖とする難波家及び藤原雅経を祖とする飛鳥井家などに定着するようになり、蹴鞠道が成立した。蹴鞠道の成立は蹴鞠の普及をもたらし、飛鳥井流には鎌倉幕府二代将軍・源頼家(1182～1204)らが、難波流には鎌倉幕府五代執権・北条時頼(1227～1263)らが入門し、こうして元々公家で流行っていた蹴鞠が武家にも普及した。さらに、江戸時代に入ってから、蹴鞠は徐々に庶民にまで普及したのである。

蹴鞠の文化が消失した中国とは異なり、現代でも伝統行事として日本各地で蹴鞠が行われている。日本では明治三十六(1903)年に「蹴鞠保存会」が創立され、飛鳥井流を受け継いだ蹴鞠保存会は現在でも毎年の4月14日と7月7日に白峯神宮で奉納蹴鞠を行っている。『古今著聞集』に出ている鞠の精も、蹴鞠の守護神として、現在大津の平野神社と京都の白峯神宮内に祭られている。

奈良時代に中国に渡った日本のエリート層によって日本にもたらされた唐代以来の白打を原

型とした蹴鞠は、日本の統治者の提唱により貴族の間で流行り始め、形式が徐々に整い、後に技術を極めた蹴鞠達人の活躍により蹴鞠道が成立し、蹴鞠道の家がそれを伝承・教授してきた。蹴鞠道の成立こそ日本の蹴鞠が今日まで伝承できた最大の原因ではなかろうか。

注

- 1 近年の研究として、林琳『古代蹴鞠源流』（『文史雑誌』2003年第5期）、崔楽泉「中国古代蹴鞠」（『管子学刊』2004年第3期）、銭文軍「中国蹴鞠未発展成為現代足球的文化原因」（『武漢体育学院学報』第39巻第12期、2005年12月）、王俊奇「蹴鞠衰亡歴史原因再研究」（『体育文化導刊』2008年第9期）、岳長志・馬国慶『非物質文化遺産記憶档案：中国蹴鞠』（山東友誼出版社、2013年）などの論考が注目されている。
- 2 代表的な研究として、渡辺融・桑山浩然『蹴鞠の研究—公家鞠の成立』（東京大学出版会、1994年）、渡辺融『『遊庭秘抄』の研究』（『放送大学研究年報』第14号、1996年）、稲垣弘明『中世蹴鞠史の研究——鞠会を中心に』（思文閣出版、2008年）などが挙げられる。
- 3 馬興国「中日娯楽習俗交流初探」（『日本研究』1986年第1期）、廖涛・李振国「隋唐時期中国体育对日本の影響」（『体育文史』1998年第4期）、王晓平「蹴鞠在日本」（『尋根』2008年第4期）など。
- 4 水沢利忠／著『史記』（八・列伝一）、明治書院、1990年、p. 377。
- 5 林秀一／著『戦国策』（上）、明治書院、1977年、p. 256。
- 6 『全唐詩』（第四冊）、中華書局、1960年、p. 1259。
- 7 『全唐詩』（第二十冊）、中華書局、1960年、p. 8049。
- 8 銭文軍「中国蹴鞠未発展成為現代足球的文化原因」（『武漢体育学院学報』第39巻第12期、2005年12月）、王俊奇「蹴鞠衰亡歴史原因再研究」（『体育文化導刊』2008年第9期）などを参照。
- 9 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守／校注『日本書紀』③、小学館、1998年、p. 86。
- 10 西尾光一・小林保治／校注『古今著聞集』（下）、新潮社、1986年、p. 50。
- 11 藤原実資『小右記』（一）、臨川書店、1965年、p. 57。
- 12 小松茂美／編『年中行事絵巻』（日本絵巻大成8）、中央公論社、1977年、pp. 18～19。
- 13 西尾光一・小林保治／校注『古今著聞集』（下）、新潮社、1986年、pp. 52～59。
- 14 同上、p. 53。
- 15 同上、p. 53。
- 16 同上、p. 54。
- 17 同上、p. 54。
- 18 同上、p. 62。

参考文献

小松茂美／編『年中行事絵巻』（日本絵巻大成8、中央公論社、1977年）
西尾光一・小林保治／校注『古今著聞集』（下）（新潮日本古典集成第七十六回、新潮社、1986年）
飛田範夫「蹴鞠についての造園的考察」（『造園雑誌』52）、1989年）
渡辺融「『遊庭秘抄』の研究」（『放送大学研究年報』第14号、1996年）
崔楽泉「中国古代蹴鞠」（『管子学刊』2004年第3期、2004年）
銭文軍「中国蹴鞠未発展成為現代足球的文化原因」（『武漢体育学院学報』第39巻第12期、2005年12月）
王晓平「蹴鞠在日本」（『尋根』2008年第4期、2008年）